

▼上空から見たオガールエリア 広場の両側には大規模施設5棟が建ち並ぶ



# 町の担い手である民間と町民が稼ぎ 域内経済循環を生む

## 紫波町の概要

紫波町は岩手県のほぼ中央、盛岡市と花巻市の中間に位置し、総面積は238・98km<sup>2</sup>、人口は33、200人の町です。中央部は盛岡のベッドタウンとして、宅地分譲により社会増となっている一方、東西の農村地帯では自然減が進み、人口は微減で推移しています。

中央部を流れる北上川沿いから奥羽山脈の麓までの西部にかけては豊かな水田が広がり、北上高地に抱かれた東部ではりんごやぶどうといった果樹栽培が盛んな農業を基幹産業とする町です。紫波の母なる山「東根山」の麓には、ラ・フランス畑が

## 岩手県 紫波町

しわちょう



▲「南部杜氏発祥の地」紫波の蔵元4者

ら湧き出た「美人の湯」で知られる「ラ・フランス温泉館」があり、東部には特産であるぶどうに付加価値をつけるため、第3セクター「紫波フルーツパーク」を設立し、自園自醸ワインを製造しています。

また、紫波町は酒の町でもありま

す。国内最大規模の杜氏集団である「南部杜氏」の発祥の地として知られており、現在も多くの町民が農閑期となる冬期間、酒造りのために全国に出稼ぎに行きます。町内には4つの酒蔵が存在し、一昨年から「SAKE TOWN SHIMAZUプロジェクト」として、学生のインターン生と各蔵のコラボにより新しい魅力づくりに取り組んでいます。

### 「森林・有機・無機」 循環型まちづくり

紫波町は、平成12年（2000年）に「100年後の子どもたちに紫波の環境をより良い姿で残す」ことを誓った「新世紀未来宣言」を発表しました。その後、町民の環境に対する意識はいつそう高まり、翌13年には「循環型まちづくり条例」を制定し、住民、関係団体、事業者、行政が一体となって循環型まちづくりに取り組むこととなりました。現在では「資源循環」「環境創造」「環境学習」「交流と協働」の4つの観点により、各種の施策を展開しています。

総面積の58%を森林が占める町では、森林資源循環の取組として、小



▲町産木材で建築された紫波中央駅舎

学校、保育園、駅舎、役場庁舎などは、町産木材を活用し地元建設業者が施工した木造建築となっています。また有機資源循環としては、堆肥製造施設「えこ3センター」が稼働しており、町内で盛んな畜産業から発生する家畜の排せつ物や、学校給食に代表される事業系食品残さなどを約3カ月かけて完熟堆肥にして販売し、元気な土づくりによる地産地消を推進しています。無機資源循環としては、早くから3R運動やごみの分別徹底を進めてきました。さらに、第14期を迎えた「環境マイスター養成

講座」や町・住民・企業の協定に基づく「企業の森づくり活動」など、さまざまな環境学習や環境創造の取組が交流と協働のもとで展開されています。

### 公民連携による公有地活用 オガールプロジェクト

平成19年3月、当時の町長が議会で「公民連携（PPP、Public Private Partnership）によるまちづくり元年」を宣言して以来、紫波中央駅前都市整備事業「オガールプロジェクト」に取り組んできました。「成長」を意味する方言「おがる」とフランス語で「駅」を意味する「ガール」を掛け合わせ、町が持続的に成長する願いを込め「オガール」と命名されたのです。

#### ■紫波町公民連携基本計画

JR東北本線の紫波中央駅は請願駅として、平成10年3月に開業しました。町は駅前の土地10・7haを28・5億円で取得し公用・公共施設整備を図ろうとしましたが、財政難により約10年にわたって塩漬け状態となっていました。

そんな状況下で、町内建設会社役

員の岡崎正信氏がキーマンとなり、公有地を活用した公民連携による整備の可能性を模索することとなったのです。岡崎氏を中心とした市場調査と、町が100回にわたって重ねた町民との意見交換をもとに策定したのが紫波町公民連携基本計画です。開発理念は「都市と農村の暮らしを愉しみ、環境や景観に配慮したまちづくりを表現する」とし、役場庁舎や図書館の整備と民間の経済開発の方向性を示しました。なお、この計画を議会に議決いただいたことも推進力となりました。



▲開発前の紫波中央駅前町有地



## ■オガール紫波(株)とデザインガイドライン

町有地10・7haの整備は、民間に委ねる形で進めました。平成21年6月、自治体出資法人「オガール紫波(株)」を設立。町とオガール紫波(株)は協定を締結し、最も適切な担い手が事業推進の役割を果たすこととし、地域経営的な視点から総合的な調整・プロデュースを共同で行うこととしました。

オガール紫波(株)は町の代理人として、岡崎氏を中心に民間の投資誘導を図ると共に、もう一つの役割としてデザインガイドラインの策定を担いました。デザイン会議(清水義次委員長)を設置し、都市計画、ランドスケープ、情報デザイン、建築の各分野の第一人者が意見を出し合い、民間感覚による美しいまち並みの整備を図りながら、オガールエリアの価値を高め、維持していくルールを決めたのです。

## ■身の丈で造り、稼ぐ要素を取り入れた複合開発

オガールエリアには昨年度、オガール広場を挟んだ事業街区に5つの事業棟が全て完成しました。施設をこ



▲オガールエリアの複合開発

紹介しますと、平成23年4月にオープンした岩手県フットボールセンターに始まり、同24年には図書館と民間施設による官民複合施設オガールプラザ、続いて民営によるパレールボール専用アリーナとホテルの合築であるオガールベース、国内最大級の木造の役場庁舎、小児科やベーカーリーなどが入居するオガールセンター、そして平成29年4月に開園したオガール保育園と、約9年をかけて公用・公共施設と民間施設の立地による複合開発が図られました。

原動力となったのは民間に投資いただいたことであり、各事業者が市場から資金を調達し、身の丈に合っ

た仕様で施設を整備し、しっかりと稼いでいく体制を構築していることです。町が運営する図書館は「町の産業に寄与する」をコンセプトとし、集客装置としての役割を果たしています。

オガールエリアは昨年度、96万人の来場者を数えました。このエリアではスポーツや市民活動といった目的を持ってチャレンジする人のほか、買い物や通院、図書館といった日常的な目的で利用する人など、さまざまな人に利用いただいています。さらに、イベントやBBQが開催され、つながりを生む場にもなっています。



▲町の産業に寄与する紫波町図書館



▲ビアフェストで賑わいをみせるオガール広場

まちづくりの主役は民で、官は後方支援の役割を担ってきたと言えます。官は民が稼ぐための土壌をつくり、民にしっかりと稼いで税金を納めていただくことで公共空間と公共サービスを維持していく。来場者にとっては、官民の敷地の区別はあまり関係ありません。官民が連携し、エリアの魅力を創り、維持する取組が価値を生んでいると言えるでしょう。

## 域内経済循環を目指す 紫波型エコハウスの普及

「オガールタウン日誌二十一区」は



▲町産材を使い断熱気密に優れた紫波型エコハウス

町が制度をつくり、地元企業が稼ぐ仕組みです。町はデザイン会議にアドバイザーをもらいながら、紫波型エコハウス研究会を組織して地元工務店等と断熱・気密性能を高めて消費エネルギーを抑えた住宅を、町産材を使って施工するという基準を決めました。実地検証するためモデルハウスを建て、エコハウスの施工技術も取得してもらいました。町は56区画の宅地を、町内指定事業者（現在13社）が紫波型エコハウス基準を満たす住宅を建築するという建築条件を付けて直接分譲しています。地元工務店が施工することにより建築

費用の約7割が地元で落ちると言われています。

そして何より、快適で健康に暮らしています、という嬉しい住民の声があります。今ではオガールタウン外に紫波型エコハウス基準の家を建てたい、という建主もいるようです。

また、オガールエリアには、民間が森林資源を有効活用した木質チップボイラーでつくった熱を、配管を通じて役場庁舎やオガールベース、オガールタウンに供給する地域熱供給システムを構築しています。オガールエリアは、地域資源を活用しながら、地元企業と域内経済循環を目指した循環型まちづくりの集大成とも言えます。

### 日詰リノベーション まちづくり

公民連携基本計画では、遊休公有不動産を活用したオガールから、複数の小さな遊休民間不動産が存在する日詰商店街地区までを公民連携開発区域としています。

同地区は、頑張っている事業者がいるものの、往時の賑わいにはほど遠く、後継者も少ない状況です。そ



▲リノベーションしてオープンした「はちずめ菓子店」

こで、新しい事業者を誘導し、空き店舗などを活用して、小さいながらもこれからの時代に即した事業を展開する「日詰リノベーションまちづくり」に平成27年度から取り組んでいます。

行政の役割はリノベーションスクールなどを通じた学びの場の提供です。民間主導で事業を立ち上げ、行政は後方支援を行う。これはオガールにも通じています。昨年度あたりから、地元で活躍する人と他所から来て起業する人が共同で取り組む事例が出てきました。田舎であるからこそ人のつながりが大事であり、そのつながりや出会いから希少性の高

い事業が生まれ、それが集積することでエリアの価値が高まっていく。その効果が生まれ始めています。

### おわりに

町は困り事があったからこそ公民連携を選択し、オガールは民間の市場原理に沿って作られてきました。そして民間と町民が活躍し賑わいが生まれ、エリア価値が高まってきました。その根底には、町の資源・人材を活用し、域内循環を図る循環型まちづくりがあります。

町の担い手は民。町民と民間です。縮退社会を迎えるにあたり、これまでのやり方が通用しないと言われていきます。身の丈でつくること、稼ぐ仕組みを考えること、地域資源を掛け合わせて新しい価値を創出することが求められています。この公民連携による新しい価値づくりを町内全域に広め「住みたい、住み続けたい」という選ばれる町を目指していきます。

紫波町長 熊谷 泉

（平成30年11月12日付第3061号）



▼リアス式海岸を一望できる田束山



いのちめぐるまち

南三陸

#### 南三陸町の概要

南三陸町は、宮城県北東部に位置し、馬蹄形の形はリアス式海岸特有の猛々しい風光を有する三陸復興国立公園の一角を形成しています。

面積は163・4km<sup>2</sup>。東西、南北とも約18kmで、西・北・南西は北上山地の支脈の南東にあり、東は海に向かって開け、西の田束山嶺から海に向かっては、北上山地の山麓部、開析された海岸段丘を経て海岸部に至っています。海岸部は、日本有数の養殖漁場になっています。

気候は、太平洋岸に位置するため、海流の影響により夏は涼しく、冬は雪が少なく、比較的温暖な地です。

宮城県  
南三陸町

みなみさんりくちょう

#### 町を襲った最大の津波

明治以降120年余りの間に南三陸町では、4度の津波被害を受けました。明治三陸大津波（明治29年）、昭和三陸大津波（昭和8年）、チリ地震津波（昭和35年）、そして平成23年3月11日の東日本大震災です。午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、本町で震度6弱を観測し、最大20mを超える津波が町を襲いました。死者620人、行方不明者211人。建物（住家）の半壊以上は3,321戸（※61・94%）。一瞬にして古里を飲み込んだ津波は、私たちのかけがえのない家族や友人、そして思い出までも奪い去りました。



※平成23年2月末日時点の住民基本台帳世帯数に対する割合



▲戸倉小学校

### 震災からの復興状況

新しいまちづくりには住民の意向が大切と考え、全世帯を対象に「復興まちづくりに関する意向調査」を実施しました。「この結果に基づき」「教育・医療・利便性」を重視し、今まで復旧・復興事業を進めてきました。

町内には8校の小中学校がありましたが、そのうち6校が被災。特に海岸付近にあった戸倉小学校は、3

階建ての校舎屋上を越える津波で全壊しました。震災後は、隣市の学校を借りし、その後は町内の小学校に併設して教育活動を行っていましたが、平成27年8月に校舎が完成し、町内すべての学校が復旧しました。

町内唯一の病院であった公立志津川病院は、震災によって被災しました。震災後は、イスラエル医療支援チームが医療活動を行い、活動終了後は、同チームが使用していた医療機器等が寄贈され、それをもとに診察等を行ってきました。その後は、町内に設置した公立南三陸診療所と隣市に開設した公立志津川病院で診察を行ってきましたが、平成27年12



▲国内外からの多くの支援で開院した南三陸病院・総合ケアセンター南三陸



▲さんさん商店街

月に医療・保健・福祉が連携した南三陸病院・総合ケアセンター南三陸が開院しました。

また、交通インフラについても震災の津波によって流出したJR気仙沼線の一部区間がBRT（バス高速輸送システム）で運行を開始したほか、国道や復興道路として位置づけられた三陸沿岸道路も南三陸町内で開通しました。震災で被災した市街地は、約10mのかさあげ工事を行い、商店街の再建やスーパーがオープンするなど、住民の利便性は確保されつつあります。

### 森の取組

南三陸町は町境が分水嶺と重なっています。そのため、町に降った雨は町内の森、里を伝い海に注ぎ込むという独特の地形を持っています。森、里、海、そして人の関係性が近く、平成23年12月に策定した南三陸町震災復興計画では、町民が自然と共生をしながら安心して暮らせるまちづくりを進めるとともに、農林水産業を含む産業の再生・発展を目指すことを盛り込みました。また、同計画の基本理念を踏まえ、南三陸町バイオマス産業都市構想も策定しました。そして、これらの計画によって生まれたのが適正な森林管理を認証する国際的な機関、FSC（Forest Stewardship Council：森林管理協議会）の認証取得です。

本町の主要産業は第1次産業です。この産業の豊かさの源泉は、町の約8割を占める山林からもたらされます。森が育むミネラルや栄養分をたっぷり含んだ水は、川や水田を通して海へと注ぎ、カキやホタテ、ワカメなどの貴重な栄養分となります。





▲日本初の公共施設におけるFSC全体プロジェクト認証  
南三陸町役場

今後、本町の認証材は、新国立競技場のなかでも使用される予定です。FSC認証を通じて、林業の活性化を図るとともに、被災地の復興を世界へと発信していきます。

## 里の取組

前述のとおり、本町ではバイオマス産業都市構想を策定しています。この構想の中心事業として掲げているのが、バイオガス事業です。

町内の生ごみやし尿・合併浄化槽汚泥（余剰汚泥）は、バイオガス施設に収集しています。施設では、メタン菌の働きによってバイオガスと液体肥料（液肥）に生成され、生成された液肥は、町内の農家や家庭菜園等で活用されることで環境保全型農業に寄与しています。これにより隣市で焼却処理していた生ごみの資源化と地域内循環が可能となりました。町内にはごみ焼却施設がなく、隣市にごみの焼却を委託している状況です。また、震災で公共下水処理施設が停止となったなか、ごみの減量・リサイクルの促進、し尿・合併浄化槽汚泥などの町内処理システムの構築が

重要な課題となっていたのです。

バイオガス施設を稼働させていくには、住民の生ごみ分別が不可欠です。そのために地元有志の方々がキャラクターや紙芝居、新聞などを作成し、普及啓発に協力いただいたこともあり、分別した生ごみの量の増加や異物混入率の減少となり、バイオガス施設の安定操業へとつながっています。

分別生ごみ量の増加もあり、副産物である液肥も増加しました。液肥

の利用については、肥料登録を行い、町・農協・バイオガス事業者と連携しながら農家に普及してきました。農家にとって化学肥料の代替として液肥を使うことは、コスト面の削減だけではなく、労力の軽減（バイオガス事業者が液肥散布を実施）にもつながっています。また、液肥の利用によって化学肥料の使用量を削減することになるので、環境保全型農業の振興に役立つほか、これによって栽培された農産物は、循環型・環境保全型農産物としてブランド化されるなど、メリットが生まれています。

## 海の取組

平成28年3月、宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所が管轄するカキ養殖が国内初のASC認証を取得しました。ASCとは、水産養殖管理協議会（Aquaculture Stewardship Council）のことで、環境に負荷をかけず地域社会に配慮して操業している養殖業に対する国際的な認証制度です。

震災前の戸倉地区では、養殖施設が密殖状態であったため、カキの身入りが悪く出荷までに3年を要していました。しかし、震災後の再出発に際し養殖施設台数を3分の1に減らすことを決断。漁業者にとっては、これまでの実績やプライドを捨て、そして収入もやってみなければ分からないという不安のなか、良いカキを作りたい一心でスタートしました。結果、密殖を避けたことで海の結果がよくなり、カキの身入りが向上。出荷するまでに3年かかっていたのが、1年で出荷できるようになりました。このことにより、漁業者の所得向上や労働時間の短縮、後継者の

増加へもつながっています。

私たちにとって、海はかけがえのないものです。海は私たちの多くの恩恵を与えてくれます。私たちはこの大切な海を守り、活用し、学習や交流をしていくため、ラムサール条約への登録に平成22年から動き出しました。しかし、震災で町が被災したことから、登録活動は中断を余儀なくされました。震災から5年後の平成28年から本格的な活動を再開し、住民説明会やシンポジウムを開催してきました。寒流と暖流が混ざり合う独特の海洋環境にある志津川湾では、動物553種、海藻・海草類2



▲FSC・ASCダブル認証取得

08種が確認されるなど、豊かな生態系が形成されています。また、世界に8千羽ほどしか生息していない国の天然記念物で絶滅危惧種に指定されているコクガン、100羽から200羽が、餌となる藻場（海藻・海草）を求めて冬の志津川湾にやってきています。これらの貴重さが認められ、平成30年10月に志津川湾はラムサール条約湿地に登録されました。日本国内では52番目、海藻藻場としては国内初登録です。

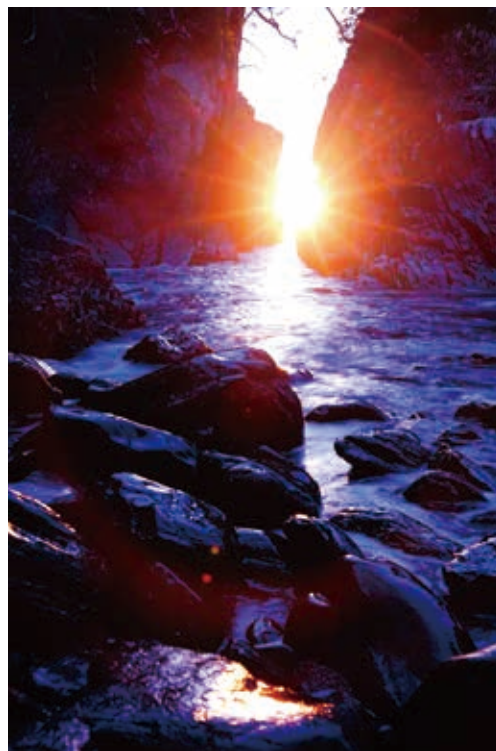


▲南三陸町の海「志津川湾」

### 終わりに

震災前、海沿いを中心に家々が並び集落を形成していた南三陸町。震災後は、二度と津波で尊い命を失わないため、職住分離の道を選択し、高台に災害公営住宅等を建設しました。一方、低地部は高台造成で出土を利用し、約10mのかさ上げを行い、交流施設や商業施設などを配置してきました。

本町は、過去に経験したことがない職住分離というまちづくりのなかで高台と低地部の賑わいの創出や人口流出問題に直面しています。しかし、私たちは今日まで「震災前より



▲神様が割って作ったと言われる神割崎

良いまちにしよう！」を合言葉に、官民一体となって復旧・復興、そしてまちづくりを進めてきました。課題のハードルは高いですが、クリアできないことはありません。これまでに以上に官民がスクラムを組み、さまざまな問題を解決していきたいと思っています。

最後になりますが、東日本大震災では、全国、全世界から温かいご支援をいただきました。皆様のお陰で南三陸町は着実に復興への道を歩んでいます。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

南三陸町長 佐藤 仁  
(令和元年5月24日付第3084号)



▼月山山頂



# 日本一住みやすく 住み続けたい町の実現から発展へ

## 庄内町の概要

庄内町は、山形県の北西部にあり、米どころである庄内平野のほぼ中央に位置しています。日本遺産にも選定された出羽三山のひとつ、霊峰「月山」の山頂を有し、そこから流れ出た水は「平成の名水百選」の立谷沢川から、日本三大急流の最上川と合流し田畑を潤しています。また、全国的に有名な良食味米、「ササニシキ」、「コシヒカリ」などのルーツ、「亀ノ尾」の発祥の地です。

平坦で豊かな地勢を生かした美田と、花き栽培の品質の良さから「米と花のまち」として定着しています。また、日本三大悪風といわれる清川東風（ダシ）を逆手に取った日本で初の風力発電事業や、天然ガスの自噴による

## 山形県 庄内町 しょうないまち

町営のガス事業等から「新エネ100選」に選定されるなど、環境にもやさしい町です。

## 持続可能な庄内町の姿

将来における持続可能な町に向けては、自主財源の確保と歳出の抑制を図ることが重要になります。平成17年7月に余目町と立川町が合併し、庄内町となって今年で16年目を迎えました。

▶風車群



|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 面積  | 249.26km <sup>2</sup> |
| 人口  | 21,137人               |
| 世帯数 | 7,096世帯               |

[令和元年6月1日現在]



住民の理解のもとに、今後、何ができるか、何をすべきか。本町の正念場はこれからです。自立した特色あるまちづくりを目指して、発想を転換しながら多方面にチャレンジしていくことを考えています。

### 住まいるタウン・イン・庄内

「移住・定住・交流・関係人口の増加でまちの元気を盛り上げる」

庄内町は、人口10万人規模の酒田市、鶴岡市を両翼とする交通の要衝の町です。これまで、両市のベッドタウンとしての魅力を活かした人口増加を目的とした事業を重点政策として展開してきました。住宅建築やリフォームに補助する「持家住宅建設祝金制度」が好評で、現在、町内の住宅団地等はほぼ完売状態です。また、転入希望者の要



▲高規格道路



▲子育て応援住宅

望にこたえるための若者向け「子育て応援住宅」や「新住宅団地」等を民間活用で計画しています。さらに、団塊世代の転入も視野に、空き家の活用等でのUIJターンの促進を図っています。

#### 重点1

#### 産業活力日本一のまちづくり

#### ◆高速交通網を活用した広域交流の輪

地域高規格道路「余目酒田道路」が平成30年3月18日に開通し、隣接する市町村との連携・交流が強化されました。今後進む高速交通網の整備は、企業進出や通勤・通学等の広域化につながります。平成28年度には、山形県への進出企業24社のうち12社が庄内へ進出しており、庄内地方全体での企業誘致や雇用が増加しています。

#### ◆農業は町の基幹産業

日本一おいしいお米のふるさと、日本一品質の高い花の町

庄内町は日本一おいしい米のふるさとであり、日本一品質の高い花づくりの町です。なかでも、平成30年度に5・7億円余であった町の「ふるさと納税」の返礼品は、「米」が約80%を占めるほどの人気です。しかし、農業従事者の高齢化や後継者不足が今後の課題となっています。そのため、農業の規模拡大による効率化、AI活用や全国から「地域おこし協力隊」を募る等、新規農業者の育成と確保に努めています。花の栽培には、町が建設した「種苗センター」の活用で、品質の均一化と苗作りの負担軽減を可能にし、花き栽培農家の増加を図っています。

また、町で作られた農産物や特産品は、町で整備した「新産業創造館クラッセ」の産直市場やレストラン、「道の駅しょうない風車市場」、「学校給食共同調理場」などの各施設で販売や活用を促進しています。

さらに、庄内町は、「亀ノ尾」発祥のおいしいお米のルーツの町であり、米作りに誇りを持つ米農家のPRの場として、毎年「あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト」を開催しています。昨年で第13回を数えたこのコンテストは、全国から500件を超える申し込みがあり、例年キャンセル待ちが



▲あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト

出るほど人気を博しているコンテストとして定着しています。

#### ★おいしいお米のルーツ「亀ノ尾」は庄内町

本町では、現在のほとんどの良食味米につながる品種、「亀ノ尾」の創作者・阿部亀治をはじめ「森多早生」の森屋正助など、ササニシキやコシヒ



▶「亀ノ尾」の創作者  
阿部亀治

庄内町小出新田生まれ。良質米品種のササニシキやコシヒカリのルーツとして名高い、「亀ノ尾」を作り出した水稻育種家。



カリなどにつながる多くの水稻育種家を輩出しています。

## ◆商・工業の振興は、雇用の確保と起業家育成

庄内町では、平成20年度から「持家住宅建設祝金制度」を開始しました。この事業は、地域内経済循環を図る景気対策と建設業の後継者育成支援という観点から非常に好評です。事業規模は毎年約7億円程度に達しており、庄内町から始めたこの事業は、今では全国的な広がりを見せています。また、この制度の他に、人口減少対策として、若者定住支援制度、空き家登録データバンク制度等にも取り組んでおり、平成21年度からの10年間で、これら制度を活用し町に移住・定住した方は58

3人となっています。

既存の商店街の活性化としては、町の多くの飲食店を網羅した「たべくらパスポート」の作成支援を行い、「一店逸品」運動や町独自の「プレミアム商品券」などを発行することなどで、個々に店の消費拡大を図り、にぎわいを創出しています。

## ◆美しい自然と歴史を魅せる、庄内町の観光

庄内町は、日本遺産登録の霊峰「月山」山頂の町、平成の名水百選「立谷沢川」、国の有形登録文化財「瀬場と六淵の砂防堰堤」、新工芸百選「風力発電と天然ガスの町」、世界かんがい遺産「北楯大堰」など自然豊かな観光資源が豊富です。また、人工芝のサッカー場や屋内運動場2棟を含めたスポーツ公園、日本一大きな米蔵を活用した「新産業創造館クラッセ」、「ギャラリー温泉町湯」、「道の駅しづな い風車市場」や、「清川歴史公園 庄内藩清川関所」など各施設の整備も行っています。他にも、明治維新の魁と称され新撰組結成のきっかけをつかった、本町出身の幕末の志士である清河八郎の生涯を紹介する「清河八郎記念館」もあります。

これらにより、平成30年までの5年間で町への観光入込客数は約60万人増加となり90万人を超え、100万人達成を目指しています。また、観光には宿泊施設の充実が欠かせないため、現在、民間投資型の宿泊施設の整備支援についても検討中です。



「平成の名水百選」とは、水質のよさを保っている湧水や河川など、環境省が選定したもので、山形県では唯一、庄内町の「立谷沢川」が選ばれました。  
立谷沢川は、庄内町の頂・月山を水源に、北上して清川の最上川に合流する全国屈指の清流です。



清河八郎

激動の幕末を駆け抜けた明治維新の魁「清河八郎」  
「西の吉田松陰、東の清河八郎」と称される尊皇攘夷のリーダー。

## 重点2

### 子育て・教育日本一のまちづくり

#### ◆子どもたちや若者の希望に応える

本町の「子育て支援日本一」は、50余りの施策の数や総合的な充実度、保護者負担の軽減においても認知度が高くなっています。平成21年に「庄内町子育て応援日本一の町づくり宣言」を行い、住民主導の支援組織と協働で町民の意識醸成に努め、子育て現役世代の方々の応援施策をきめ細かに実行し



ランドセル贈呈式

てきました。シンボリックな事業としては、毎年、地元小学校入学児童に対しては「ランドセル」と「黄色い帽子」を、中学校の入学時には「通学用力パン」を贈呈するなど、いじめや貧困対策を含め、子どもたちが自立するまでの期間、節目ごとにきめ細かい支援を行っています。

少子化対策と若者の結婚支援では、結婚適齢期の「同窓会開催支援」、広域での「結婚活動」への取組強化や町の「相談窓口の二元化」、商工会青年部の企画による「街コン助成」など、男女の出会いの場づくりを応援しています。

## ★地域おこし協力隊は、まちに新しい風を吹き込んでいる

地域おこし協力隊は、多くの分野で地域課題の解決に向けて活躍しています。本町では、現在7人の地域おこし協力隊が、音楽指導、観光振興や農業の6次産業等、町の特性を活かす分野に従事しています。そのうちの一人である進藤和真氏は、平成30年度から町の小中学生だけでなく、本町唯一の高等学校である庄内総合高校のサッカー部コーチとしてもチームの育成強化に活躍中です。進藤氏は、過去にインターハイで神奈川県立の日本大学藤沢高校を準優勝に導いた実績があり、県下でも数少ないスポーツ分野での地域おこし協力隊員です。



▲庄内総合高校サッカー部  
▲地域おこし協力隊の進藤氏

### 重点3

健康長寿日本一のまちを目指して

◆元気で長寿！病氣予防の徹底

超高齢社会の生き方と課題の解決は、「元気で長寿、ぴんぴんころり」が理想です。そのために町では、がんの早期発見に向けて「がん検診の無料化」や、肺炎予防に「肺炎球菌ワクチン接種」助成を実施しています。また、高齢者の交通事故防止に、免許証自主返納者への「タクシー券毎年助成」や、高齢者の外出支援に「町営バスの無料化と市街地巡回バスの新設」、「無料温泉入浴券」の配布、「健康マイレージ」の推進など、各種事業を展開しています。

### 重点4

安心・安全日本一の町を目指して

◆安心・安全は、住みよい町の基本  
住みよい町の一番の基本は、安心・安全であることです。災害や犯罪の防止はもとより、いざとなったときの医療・介護施設の充実、関係機関との連携を密にし、ともに安心・安全なまちづくりにつながります。また、町独自の経営による上・下水道、町営ガス事業等、公共料金等には上げない努力の徹底で住民負担の軽減を図っています。

### 重点5

環境共生日本一のまちを目指して

◆自然の豊かさは若者や子育て世代に魅力

自然の豊かさは簡単に手に入るものではなく、若者や子育て世代にとっても魅力的な要素です。日本遺産に認定された出羽三山のひとつ「月山山頂の町」、「風力発電発祥の町」、自噴する天然ガスの利用などで「新エネ100選」にも選ばれた町として、環境にやさしい、豊かな自然を活かした交流・関係人口の拡大を図り、都会からの移住・定住を促進しています。

### むすびに

旧立川町、旧余目町の2町の合併から、今年で16年目を迎えました。今後は、2万1千人余の新たな「庄内町」として生きていくこととなります。合

新庁舎イメージ



併の特例が無くなることから厳しくなる財政状況を想定し、さらなる町民の「参画と協働」を推進しなければなりません。

また、令和2年度には、合併後最大の事業、役場庁舎が新しく生まれ変わります。これを機会に、あらためて、将来に向けて課題の整理を行いながら、「日本一住みやすく、住み続けたい町」への挑戦を続けます。

庄内町長 原田 眞樹  
(令和2年2月17日付第3110号)



日本一大きい米蔵を改修  
新産業創造館「クラッセ」



おしゃれな温泉  
ギャラリー温泉「町湯」



歴史の里きよかわ  
庄内藩 清川関所





▼天神平天空のナイトクルージング(イメージ)

# 利根川源流のまち 水と森林と人を育む みなかみユネスコエコパーク

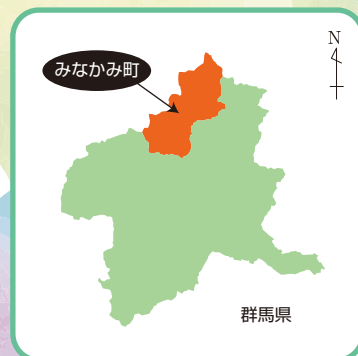
## 群馬県 みなかみ町

みなかみまち

### みなかみ町の概要

みなかみ町は、群馬県の最北端に位置し、谷川岳の雄大な自然に抱かれ清らかな水が脈々と流れる利根川源流の町です。東京から直線距離で約150km、関越自動車道で約1時間30分、JR上越新幹線で最短66分と首都圏からのアクセスに恵まれています。2005年10月、2町1村が合併して誕生した町で、面積は781.08km<sup>2</sup>と群馬県の8分の1を占めています。

利根川の源流域として5つのダムがあり、東京をはじめとする首都圏の経済や生活を維持する大切な水源地域となっています。地域の標高は、300mから2000mにわたり、山間地としての特殊性があります。このような地勢は地域における産業や生活にさまざまな制約を与えていますが、山岳、森



4

自然環境対策・再生可能エネルギー、災害防災対策・危機管理



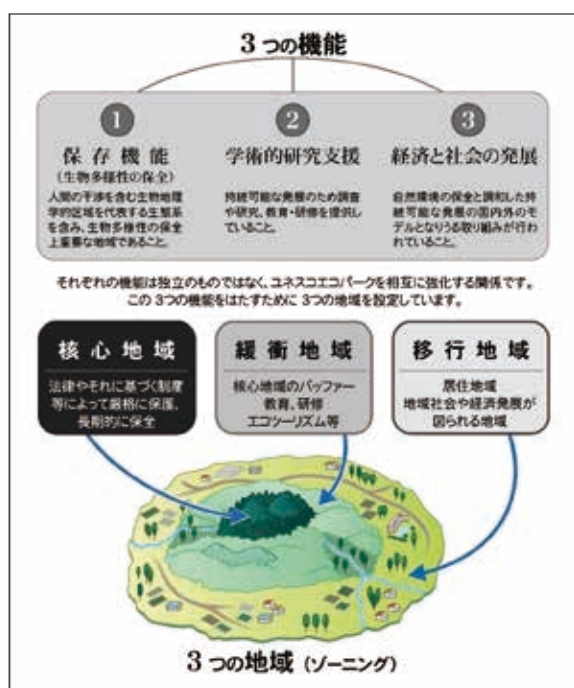


▲みなかみ町全景

林、高原、湖沼、河川、溪谷など変化に富んだスケールの大きい自然は、上信越高原国立公園に指定されているように、国内でも有数の観光資源であり、豊富な温泉とも相まって、観光地としても有名です。

## ユネスコエコパーク登録

町ではこの素晴らしい自然を、最も大切な宝としてまもり、いかし、ひろめるため、人と自然が共生する持続可能な地域づくりに取り組んでいます。また、谷川岳のエコツーリズムの活動や林野庁・日本自然保護協会・地域住民の3者が協働し生物多様性の保全や活用を行う赤谷プロジェクトの活動など、地域主体の取組も進んでいます。



▲ユネスコエコパーク (三つの機能・三つの地域)

に登録されており、日本ではみなかみユネスコエコパークを含め9カ所の地域が登録されています。

みなかみユネスコエコパークの登録に伴い、町のブランド力やイメージの向上、自然環境保全など多様な効果が期待されますが、最も大切なことは、町に住む人々が改めて町の素晴らしいさを認識し「みなかみ町に住んでいてよかった」と思うこと、そして町の自然をテーマに町民、事業者、官公庁がまちづくりのベクトルを合わせ、地域が元気になっていくことです。

## 人と自然が共生する取組

### ●赤谷プロジェクト

2003年11月に発足した「赤谷プロジェクト」は、町内新治地区を流れる赤谷川の上流域に広がる約1万haの国有林「赤谷の森」を舞台に、生物多様性の復元と、持続的な地域づくりを進める取組です。地域住民で組



▲環境学習 (赤谷プロジェクト)

織する「赤谷プロジェクト地域協議会」、日本全国で自然保護活動に取り組むNGO「公益財団法人日本自然保護協会」、舞台となる国有林を管理する「林野庁関東森林管理局」の3つのセクターの協働により進めています。

「赤谷の森」の現状を科学的に把握するために、森林生態系の豊かさを指標する野生動植物に注目しています。例えば、一つがいのイヌワシが上流域に行動圏をもち生息しています。大型猛禽類であるイヌワシは森林生態系の食物ピラミッドの頂点に位置する野生動物です。つまり、安定して子育てをしながら生息できるかどうかは、赤谷の森の豊かさ(=生物多様性の状況)にかかっています。

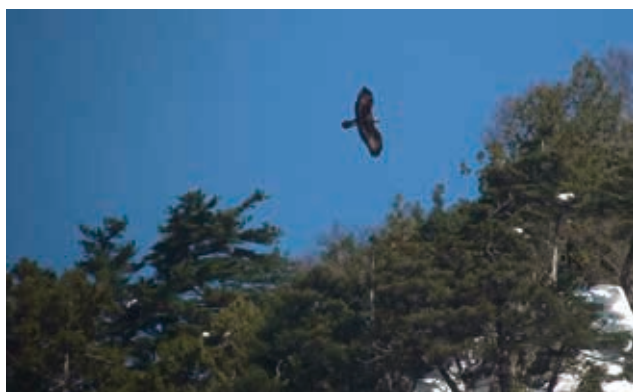
これまでに、小中学校を対象とした



## ●谷川岳エコツーリズム

2008年12月に、エコツーリズム推進法の理念に則した基本方針のもとに谷川岳エコツーリズム推進協議会準備会がスタートし、谷川岳エコツーリ

環境教育、観光業の方々と連携した赤谷の森のハイキングマップの作成、地元にある日本のカスターネット発祥の工場や製材工場と連携した「赤谷の森」の木材によるカスターネット製造など、赤谷の森の豊かさや魅力を伝え、森の恵みを持続的に資源利用することで、赤谷プロジェクトの先進的な取組が付加価値となるようさまざまな地域産業に貢献する試みを行っています。



▲赤谷の森のイヌワシ

ズム推進協議会を経て2012年6月29日に全体構想が、全国で3番目に、国立公園内では初めて認定されました。

谷川岳エコツーリズムの基本方針としては、エコツーリズム推進法の「自然への配慮」「観光振興への寄与」「地域振興への寄与」「環境教育への活用」といった理念のもとで、自然環境のほか歴史や文化等を観光対象とし、その持続可能性を探り最大限にそれらを活用し、訪れた多くの人たちと交流を深め広げることで町の発展に寄与すること、すなわち「守る活かす交わる」を基本方針としています。

全体構想の実現に向け、自然環境や生物多様性を適正に利活用するためのモニタリング調査、エコツアーカーニ



▲エコツアー（スノーシューツアー）

バルやスノーシューフェスティバルを開催して魅力の発信、車両の乗り入れ規制による歩行者の安全の確保及び特定外来生物に指定されている「オオハシゴンソウ」の除去活動による環境保全などを行っています。

## 自伐型林業による担い手の育成

町では、森林や林業に関わる人を増やし、森林資源の有効活用を促進することで環境を保全するため、山林所有者や地域住民が主体的に携わることができる「自伐型林業」を推進しています。大規模林業と比べて低コストで始められ、副業的な携わり方も可能であるため、誰もが参入しやすく継続性も高いとされています。山林の所有と管理の距離が近い（所有者の場合は一致）



▲一ノ倉沢電気バス

ため、山林を長期的に経営する意識が自ずと働くのも特徴です。

未経験者でも林業に取り組めるよう、町では2016年から毎年、チエーンソーの取扱や伐倒・造材、搬出や作業道の開設などの実践的な知識と技術を学べる本格的な自伐型林業研修を開催しています。これまでに約140名が参加し、50名を超える人達が森林や林業に関わる活動を始めています。受講者が新たな仲間を巻き込み、活動の輪がどんどん広がっている状況で、サラーマンや自営業者、公務員など参画している人達の業種はさまざまです。町内で盛んなアウトドアスポーツのインストラクターのグループが仕事の閑散期の対策として活動を開始するなど、新たな雇用の創出にも期待が寄



▲自伐型林業研修

せられています。

## 森林資源の活用による 環境保全

環境を保全するために伐り出された木材は、量的に多くありませんが細かな活用が可能で、官民が連携してさまざまな活用を試みています。これまでも、町内こども園で使う木のおもちゃに加工したり、民間事業者が既存の灯油ボイラーを薪ボイラーに転換して燃料の薪としたり、イベントなどで活用するなど、小さいながらも森林資源と経済の地域内循環が広がっています。2018年12月には、国産材を使った家具の製造販売や建築を手掛けるオークヴィレッジ株式会社（岐阜県）と町が、林業の六次産業化と地域活性化に関する包括連携協定を締結しまし



▲木育・木のためこ

た。森林整備の過程で伐り出された広葉樹を活用し同社が製品づくりと販売を行うもので、良好な森林づくりと経済性を両立する持続的森林経営モデルの確立を目指しています。

さらに町では、森林や木との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育てる「木育」の推進にも力を入れていて、2016年7月に「ウッドスタート宣言」を行い、生まれてきた子どもにも本町が発祥のカスタネットをプレゼントするとともに、東京おもちゃ美術館と連携して木育キャラバンを毎年開催しています。幼少の頃から木にふれることを通じて、木を身近に感じ、その魅力を知ってもらう取組を進めています。

## これからのまちづくり

今年度は町にとって大きなイベントが開催されます。ひとつは群馬DC（ディスティネーション・キャンペーン）です。2020年4月から6月までの3ヶ月間、県内の市町村や観光関係者と全国のJR6社などが一体となって行う大型観光キャンペーンです。「心にググッとぐんま わくわく体験 新発見」をテーマに、全国に誇る温泉や自然、歴史・文化遺産、グルメなどの魅力を発信します。PRDCの本年は谷川岳において、天空のナイトクルージングや早朝ヒーリングス

## ふるさとキラキラフェスティバル



アーを実施します。天神平ロープウェイでは夜間運行に合わせてデジタル掛け軸を投影します。

もうひとつは、「花と緑のぐんまづくり ふるさとキラキラフェスティバル」です。2008年に開催した「全国都市緑化ぐんまフェア」の理念を将来に引き継ぎ、8月31日から9月23日まで「ふるさとキラキラフェスティバル花と緑のぐんまづくり2019 in みなかみ」を、メイン会場は道の駅「たぐみの里」で、サテライト会場は同じく「水紀行館」「矢瀬親水公園」で開催します。テーマは「世界が見つめる花と緑の水源地のまち みなかみユネスコエコパーク」として、会場ではそばの花、街並みも季節の花でいっぱいになります。週末を中心に花と緑のコン

テストなど盛りだくさんの楽しいイベントを行います。

みなかみユネスコエコパークが誕生して早いもので2年と

が、ユネスコエコパークの登録はゴールではなくむしろスタートと考えています。従来からの歴史や文化、自然と共生する活動のほか、新たに小中学校及び高等学校の一部ではユネスコの理念である平和や国際的な連携を実践する学校としてユネスコスクールに加盟し、持続可能な開発のための教育（ESD）への取組が始まりました。今後、も恵まれた自然環境を「まもる・いかす・ひろめる」取組を図りながら、ユネスコエコパークの理念に基づき、町の資源を活かした持続可能なまちづくりを進めていきます。

みなかみ町長 鬼頭 春二  
（令和元年6月3日付第3082号）



▼美しく咲き誇る幻の花「花かつみ」



# みどりと共生する快適生活 空間・あぐい

## 元気のある町、阿久比町

愛知県知多半島のほぼ中央部に位置する阿久比町は、二三・八〇km<sup>2</sup>の面積を持ち、穏やかに四季がうつろう豊かな自然に恵まれた町です。町の真ん中をふるさとの川「阿久比川」が流れ、昔ながらの恵みの川に生きる草花や虫たち。自然と共生できる「幸せ」は、私たちの自慢です。

藤原京から出土した木簡に「甲午年（西暦六九四年） 阿具比」と記され、米を送ったとされる記録が残ることから、少なくとも一三二〇年以上前の飛鳥時代から「阿久比」のルーツがあったといわれています。おい

## 愛知県 阿久比町

あぐいちょう



しい米「阿久比米」の産地として知られ、「米どころ」の町、「花かつみ」の町、「阿久比谷虫供養」伝承の町として、長い歴史と文化が息づいています。

現在の人口は二万八、六八五人（平成三十年六月一日現在）。名古屋や西三河から車で三十分圏内、中部国際空港からは車で二十分圏内にあり、都市への交通利便性に優れた住みやすい町です。さらには近年行われた大規模な住宅地開発によって、町外から多くの方が移り住み、人口が増加しています。

平成二十七年国勢調査では、平成二十二年調査と比べ、県内の世帯増加率一位、人口増加率も二位となりました。

4

自然環境対策・再生可能エネルギー、災害防災対策・危機管理

▲平成二十九年四月に完成した新庁舎。  
完成式典は多くの方でにぎわった



ました。

また、愛知県がまとめた『あいちの市町村民所得』で、平成二十七年の経済成長率が県下トップとなり、元気のある町としても注目されています。

平成二十九年四月には、名古屋鉄道阿久比駅近くに新庁舎が完成しました。この庁舎は災害時には住民を守る避難所として多目的ホールを併設しているほか、町の中心としてのランドマークと位置付け、住民をはじめ、多くの方が気軽に集まることのできる複合型庁舎となっています。

今年、阿久比町が誕生して六十五

周年。広い空と緑の多さ、子育てのしやすい環境と交通アクセスの良さを生かし、「子どもが豊かに育つ町」「子どもにも大人にも優しい町」として、安全で安心して暮らせるまちづくりを進めています。

### 家康の生母「於大の方」も 愛した幻の花「花かつみ」

町では、六月中旬に「花かつみ（花勝見）」が、鮮やかな紫色の花を咲かせます。諸説ありますが、阿久比町ではアヤメ科の多年草で、野花菖蒲（ノハナショウブ）のことを「花かつみ」と呼んでいます。

「花かつみ」は、松尾芭蕉が探しても見つけられなかった幻の花です。阿久比町には、室町時代に伯耆の国（現在の鳥取県中西部）から草木地区の下芳池に移植されたと伝えられています。

徳川家康の生母「於大の方」は、家康を生んだ後、坂部城主久松俊勝の妻として再嫁します。幼い息子と離れ、十五年間阿久比の地で暮らします。桶狭間の合戦に際し、家康は坂部城に立ち寄り、母との再会を果たしたとされています。於大の方は、

家康の武運長久を願い「花かつみ」の「勝つ」という言葉に思いを託し、花かつみを仏前に捧げたと言われています（於大の方の遺髪墓と、息子と夫の無事を祈って阿弥陀経を写した血書が、阿久比町洞雲院に残されています）。

昭和六十二年には下芳池周辺の工業団地造成に伴い、池の北側に「花かつみ園」が設置され、今では約二、五〇〇株にまで増えました。一年のうち花が咲き誇るのは、六月上旬から中旬にかけてのわずかに二週間ほどですが、花かつみ保存会の皆さんの花の手入れや地道な取組により、毎年来場者の心を打つ、美しい紫の花を咲かせています。

### 町を支える産業

古くから米の町として知られる阿久比町。温暖な気候と肥沃な水田で生産された「阿久比米」はおいしい米として高く評価されています。

平成十一年、第五回環境保全型農業推進コンクールで農林水産大臣賞を受賞した「れんげちゃん研究会」がつくる阿久比米「れんげちゃん」は、

秋に田んぼへ種まきしたレンゲを春にすき込んで肥料とする「レンゲ農法」を用いています。食への安心を求める消費者ニーズに合わせて、農業を可能な限り少なくした安全安心な特別栽培米です。

米どころとしての農業のほか、阿久比町は明治期から繊維工業が盛んな町でした。住宅街の中に町工場が数多く見られ、ガチャガチャと綿布を織る音が響いていました。時代とともに工場数は減少しましたが、繊維関連のほかにも新しい企業の進出が増えました。積極的に企業誘致も行い、周辺に大型スーパーや飲食店が増えるなど、町のにぎわいや活性化につながっています。

現在では、市場や関連企業への輸送面などの利便性から、自動車関連企業やQRコードを開発した情報関連企業をはじめ、全国で路面表示や道路標識など道路環境の整備を行う企業、全国シェアナンバーワンの屋根瓦の企業、伝統製法を受け継ぐ老舗醸造業など、さまざまな産業が町の発展を支えています。



未来に残したい  
伝統、文化、自然

町や県、国の文化財に登録されている貴重なものが阿久比町には数多くあります。

毎年、四月上旬から下旬にかけて町内四地区で繰り広げられる「山車絵巻」。勇壮な山車の曳き回し、からくり人形、三番叟など華麗な伝統芸を披露します。精緻を極めた彫刻、金糸銀糸で彩られた水引幕など大きな見どころです。「動く芸術品」である五台の山車は、阿久比町指定文化財となっています。威勢のいい掛け声や囃子の音とともに春の訪れを感じます。



▲町指定有形民俗文化財に登録されている山車

告げます。



▲県指定無形民俗文化財に登録されている「虫供養」

平安時代から伝わる「阿久比谷虫供養」は、農作業の犠牲になった虫たちを供養するために念仏を行ったことが始まりとされる民俗信仰行事です。「知多の虫供養行事」として無形民俗文化財に県指定（昭和五十八年）され、現在は十三地区の持ち回りで毎年秋分の日に行われます。戦乱の世に何度か中断されても、根強く先人たちの力でよみがえった「虫供養」は、町の誇る伝統行事です。

車の制作にも携わっていた地元「横松大工」が本堂の棟梁であった記録が棟札に残ります。「二重折り上げ格天井」と呼ばれる格式高い建築様式が用いられ、この頃の本堂としては大規模なものとなっています。

人々の手で受け継がれているのは文化財だけではありません。阿久比町が誇る豊かな自然、そこに生きた草花、虫たちも住民によって守られてきた町の宝物です。町が保護している板山高根湿地には貴重な自然環境が残り、体長2cmほどの日本最小のハッチョウトンボをはじめ、東海地方にしか生息していない絶滅危惧Ⅱ類のシラタマホシクサなど貴重な昆虫や植物が生息しています。

## ホタルは環境のバロメーター

初夏の訪れを告げるように、夕暮れに淡い幻想的な光の舞を見せてくれるホタルも町の宝物です。美しい自然環境でなければ生存しないといわれるホタルは、環境のバロメーターとして重要な役割を果たしています。ホタルの生息できる環境を後世に残していくことは、私たちに課せられる大切な使命です。昭和五十八年から自然環境保護を推進するために「ホタル飛びかう住みよい環境づくり」を目指して、ヘイケボタルの分布調査や保護などの活動に取り組んでいます。

平成元年には環境庁（現環境省）が「ふるさといきものの里」全国百十九カ所を選定し、阿久比町は「ホタルの里」として選定されました。日本一のホタルの里を目指す全国の自治体の集い「ほたるサミット」にも毎年参加しています。

町のマスコットキャラクター「アグビー」も町のPRのために活躍中です。丸くて愛らしい顔と、光るキートなお尻が特徴のヘイケボタルです。平成十五年六月に阿久比町制五十周年記念ほたるサミットあぐいのキャラクターとして誕生しました。平成二十六年には生誕十周年を



▲六月はホタルの季節。美しい光の舞があちこちで見られる

迎え、特別住民票の交付を受けたれっきとした阿久比町民です。

### 作り手の心が花となる 「みんなの菊花展」

毎年十一月初旬には、町内が「菊薫る秋」となります。緑あふれる公園「ふれあいの森」で、町民が丹精込めて育てた菊を多くの皆さんに觀賞してもらおう菊花展が開かれます。内閣総理大臣賞をはじめ数多くの賞が設けられ、昭和六十二年には国土庁監修「全国市町村なんでも日本一事典」で、住民参加型の菊花展では日本一と認められました。



▲美しい菊が見る人を魅了する「みんなの菊花展」

会場では各地区で厳選された力作の菊が大輪の花を咲かせ、所狭しと飾られ、美しい菊が皆さんを魅了します。昭和五十五年から続く展覧会では、作り手の菊への飽くなき情熱が感じ取れます。

### 阿久比の魅力を 町民とともに発信

阿久比町の魅力を町内外の皆さんに伝えるため、「阿久比ブレイガーデンプロジェクト」を展開しています。町を知ってもらうきっかけをつくるため、スペシャルムービー『あぐい TRICK MOVIE』



▲人気イベント「あぐいっしょクッキングスクール」



▲阿久比町の魅力を紹介するスペシャルムービー

in AGUITOWN』を制作しました。都会では味わえない町の魅力を、子どもたちが自由に遊び、元気に走り回る姿で表現しています。

町の魅力を感じてもらい、町内の方にも、愛着を高めてもらえるよう、屋外での上質な料理体験を演出する「あぐいっしょクッキングスクール」や「青空図書館（ブックガーデン）」、「アグルマーケット」などの事業を進めています。

「アグルマーケット」はボランティア団体で企画運営され、若い親子連れから年配の方まで、人と人とのつながりの場を提供し、役場庁舎周辺が多くの人でにぎわうイベントです。

このイベントは、ボランティア団体を町が財政的に支援する「住民税1%町民予算枠制度」わくわくコラボ事業に採択され、ほかにも町民の方が企画した事業が年間を通じて行われ、協働のまちづくりを進めています。

### この町で、笑顔は大きくなる

これからも阿久比町は、更なるステージに向け、名古屋（N）と阿久比（A）と三河（M）を結ぶNAMトライアングルによる町の発展を目指し、名古屋、三河に近い利便性を最大限に生かしながら、緑豊かな自然を守りつつ、豊かに暮らせるまちづくり『田園町富』をスローガンに進んでいきます。

自然の豊かさを悠久に守り続け、交通アクセスに優れた良好な子育て環境のベッドタウンとして、定住促進を図り、全ての住民が「この町で、笑顔は大きくなる」を実感していただけるような、「みどりと共生する快適生活空間・あぐい」を目指します。

阿久比町長 竹内 啓二

（平成30年9月3日付第3052号）



▼ゼロ・ウェイストセンター



協働によるごみゼロの町へ！  
ゼロ・ウェイスト宣言ー持続可能なまちづくりー

上勝町の概要

上勝町は、四国山脈の東面に属し、標高1000〜7000mの間に大小55の集落を有する農山村地域です。面積109km<sup>2</sup>の88%が山林で、その内80%は杉などの人工林です。徳島市中心部から車で約1時間の位置にあり、人口は1,510人、高齢者比率が52%（令和2年1月1日現在）という、少子・超高齢化の町です。

柚香（※）・すだち等の特産とする柑橘類の産地ですが、昭和56年の異常低温により、主要産業だった温州みかんがほぼ全滅しました。（※柚子と橙の自然交雑種といわれており、酸味がすだち・柚子と比べるとまろやかであることから「香りゆず」「酸味のすだち」「味ゆこう」と言われています。）

徳島県  
上勝町

かみかつちょう



この危機を打開するため考え出されたのが、日本料理に添える葉っぱや花などのつまものを商品化した「彩（いろどり）」で、当町が創出した新しい産品であると同時に、高齢者が活躍できる産業としても知られています。

上勝町のごみ処理

高度経済成長に伴う大量消費社会の到来で、農山村においても大量のごみが発生するようになり、その処理を担う自治体に財政負担が重くのしかかってきました。

当町では、ごみは自宅で燃やしたり、埋めたり、残土処理場で野焼きをしていたため、県からごみ処理施設を建設するよう指導を受けていました。野焼きを続けられなくなる一方、新しく焼却場を建設して点在す





▲リサイクル活動を表すイメージ図

る集落のごみを回収する財政的な余裕はなく、町内から出るごみの組成調査をし、「リサイクルの方策」について検討を始めました。

検討を重ねる中で、生ごみを焼却することが施設の大型化や燃料の多量消費、それによるCO<sub>2</sub>排出量の増加を招くことに気付き、家庭用電動生ごみ処理機やコンポストを用いて、各家庭で堆肥化を図ることにしました。

個人については、家庭用の電動生ごみ処理機が少額の自己負担で購入できるよう補助制度を創設し、飲食店等の事業所については業務用生ごみ処理機を設置し、組合で管理することとしました。

## 分別収集の開始

生ごみを各家庭で処理することにより、ごみ分別の取組を容易に進められることにつながり、平成9年に野焼きを禁止し、容器包装リサイクル法に則ったごみ分別を9種類でスタートしました。平成10年には小型焼却炉を2基設置し、さらに焼却ごみを減量するため分別は22種類になりましたが、法改正でダイオキシン排出基準が厳しくなり、小型焼却炉の1基が基準を満たさないことが判明し、平成13年に閉鎖せざるを得なくなりました。



▶仮設ごみステーションの分別

## 徹底分別の推進

人口の少ない上勝町ではごみの絶対量が少なく、日量100t以上の連続燃焼が基準となれば単独で焼却炉は持てません。広域化も検討しましたが構成市町村の思惑がまとまらず断念し、できる限り分別しそれでも資源化できないごみは専門の処理業者に委託することにしました。運搬・処理にかかる経費を抑えるには徹底分別し、資源化を高めることしかありません。

しかし、本町のように資源ごみの数量が少ないと引取先が見つからず、



全国各地に足を運び引取をお願いする内に、平成14年には34分別になりました。結果として焼却ごみは減り続け、平成29年度には総排出量286t、内焼却・埋立量58t、リサイクル率は79.7%にまで資源化が進みました。

## ゼロ・ウェイスト宣言

そもそも、ゼロ・ウェイストとは？  
ゼロ「0」・ウェイスト「浪費・無駄・廃棄物」、直訳すると浪費・無駄・廃棄物をなくすという意味です。ごみを出さない生産と消費のシステムを構築していく「ゼロ・ウェイスト」の理念に触れ、これをまちづくりの1つとして位置づけて運動を展開しようと、34分別を開始した翌年の平



▶紙類も細かく分別



成15年、町議会が満場一致で国内初の「ゼロ・ウェイスト宣言」を議決しました。

## 上勝町ゼロ・ウェイスト宣言

未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、2020年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意し、上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。

- 1 地球を汚さない人づくりに努めます！
- 2 ごみの再利用・再資源化を進め、2020年までに焼却・埋立て処分をなくす最善の努力をします！
- 3 地球環境をよくするため世界中に多くの仲間をつくります！

## ごみは自分で持っていく

上勝町は収集車を走らせたことがなく、ごみは町内1ヶ所の収集拠点である「ゴミステーション」に住民自ら持ち込みます。不便なようですが、ゴミステーションは年末年始の3日間を除き毎日開いており、自分の都合の良いときにごみを出すことができますし、管理員が常駐しているため、分別が分からなくても持って行けばその場で教えてもらえます。

高齢者等で運搬手段を持たない住民に対しては、2ヶ月に1回自宅ま

で収集に伺っており、訪問時に近況を聞き取るなど安否確認にも役立っています。

## リユースの取組

ゴミステーションに併設したくるくるショップは、住民が「不要になったけどまだ使える物」を持ち込み、誰でも持ち帰ることのできる無料のリユースショップです。循環率（持ち帰り量÷持込み量）は90%を超え、毎年10tもの物が再使用されています。

NPO法人ゼロ・ウェイストア카데미が運営するくるくる工房では高齢者の介護予防も兼ねて、おばあ



▲くるくるショップ

ちゃんたちが昔ながらの知恵や技術を活かして、不要になった着物や鯉のぼりなどからリメイク商品を作り販売しています。また、祭やイベントでの飲食物の提供に対してリユース食器の無料貸出も行っており、一時的に出る使い捨て容器の削減に役立っています。

## ポイント制度の導入

「ごみ分別の副産物として、紙や金属などの資源は有価で買い取ってもらい、年間約200万円の売上金収入を得ていますが、これを資源化に協力してくれた住民に還元するため、焼却ごみの減量や処理費用の減額が期待できる物を対象にポイントを付

資源を分別してポイントを得る、素敵な商品をゲットしよう！

### ちりつもポイントキャンペーン 交換対象商品一覧表

※注意※  
・商品カタログは上勝町役場、支所、ゴミステーションにて閲覧可能ですのでご確認ください。  
・申し込みに関する商品もございします。お申し込みするまでに詳細がわかることがあります。  
・その他ご了承ください。

| 300 円 | 2000mAh充電器<br>充電式カミ<br>お風呂用バスタブ<br>LED電球(100mm)<br>LED電球(150mm)<br>自動洗濯機<br>洗濯機                                                                                                                                                                                                                               |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 200 円 | LED電球(100mm)<br>LED電球(150mm)<br>LED電球(200mm)<br>LED電球(250mm)<br>LED電球(300mm)<br>LED電球(350mm)<br>LED電球(400mm)<br>LED電球(450mm)<br>LED電球(500mm)<br>LED電球(550mm)<br>LED電球(600mm)<br>LED電球(650mm)<br>LED電球(700mm)<br>LED電球(750mm)<br>LED電球(800mm)<br>LED電球(850mm)<br>LED電球(900mm)<br>LED電球(950mm)<br>LED電球(1000mm) |
| 100 円 | LED電球(100mm)<br>LED電球(150mm)<br>LED電球(200mm)<br>LED電球(250mm)<br>LED電球(300mm)<br>LED電球(350mm)<br>LED電球(400mm)<br>LED電球(450mm)<br>LED電球(500mm)<br>LED電球(550mm)<br>LED電球(600mm)<br>LED電球(650mm)<br>LED電球(700mm)<br>LED電球(750mm)<br>LED電球(800mm)<br>LED電球(850mm)<br>LED電球(900mm)<br>LED電球(950mm)<br>LED電球(1000mm) |
| 50 円  | LED電球(100mm)<br>LED電球(150mm)<br>LED電球(200mm)<br>LED電球(250mm)<br>LED電球(300mm)<br>LED電球(350mm)<br>LED電球(400mm)<br>LED電球(450mm)<br>LED電球(500mm)<br>LED電球(550mm)<br>LED電球(600mm)<br>LED電球(650mm)<br>LED電球(700mm)<br>LED電球(750mm)<br>LED電球(800mm)<br>LED電球(850mm)<br>LED電球(900mm)<br>LED電球(950mm)<br>LED電球(1000mm) |
| 30 円  | LED電球(100mm)<br>LED電球(150mm)<br>LED電球(200mm)<br>LED電球(250mm)<br>LED電球(300mm)<br>LED電球(350mm)<br>LED電球(400mm)<br>LED電球(450mm)<br>LED電球(500mm)<br>LED電球(550mm)<br>LED電球(600mm)<br>LED電球(650mm)<br>LED電球(700mm)<br>LED電球(750mm)<br>LED電球(800mm)<br>LED電球(850mm)<br>LED電球(900mm)<br>LED電球(950mm)<br>LED電球(1000mm) |
| 5 円   | LED電球(100mm)<br>LED電球(150mm)<br>LED電球(200mm)<br>LED電球(250mm)<br>LED電球(300mm)<br>LED電球(350mm)<br>LED電球(400mm)<br>LED電球(450mm)<br>LED電球(500mm)<br>LED電球(550mm)<br>LED電球(600mm)<br>LED電球(650mm)<br>LED電球(700mm)<br>LED電球(750mm)<br>LED電球(800mm)<br>LED電球(850mm)<br>LED電球(900mm)<br>LED電球(950mm)<br>LED電球(1000mm) |

▲ポイント交換できる商品

## ゼロ・ウェイスト政策における住民との連携

与し、さまざまな商品と交換できるサービスも始めました。その後、交換できる商品を大幅に拡充し、分別への関心を高めると共にモチベーションアップを計っています。

このような住民主体のごみ処理政策に理解を得られた要因としては、平成5年にスタートしたまちづくり研修、「1Q運動会」(1 Question II 地域づくり)にあり、住民個々が地域について疑問を持ち、地域課題を明らかにし、住民と職員がそれぞれの役割を担いながら解決していくという手法を取り入れた研修にあり





▼中土佐町の町並み



# 海と山と川の力を活かす 攻めと守りのまちづくり

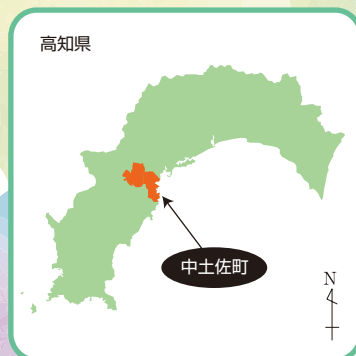
## 中土佐町の概要

中土佐町は、高知県中西部に位置し、人口6,823人（2019年3月31日時点）、面積193・28km<sup>2</sup>の町です。平成18年に旧中土佐町と大野見村が合併して誕生しました。

町は、太平洋に面した海岸部（旧中土佐町地域）と山々に囲まれた海拔300m以上の台地部（旧大野見村地域）に分かれています。旧中土佐町地域は北西および西南に山嶺が連立し、その尾根の先端は土佐湾に突出して岬となり、壁状の海岸線を形成しています。これらの山嶺に源を発する数本の中小河川が土佐湾に注ぎ、河口域は漁港、河川流域には平野が散在して耕地をなしています。漁業の町として全国的に有名で、特にカツオ漁が古くから栄えています。一方旧大野見村地域は、日

## 高知県 中土佐町

なかとさちょう



本最後の清流四万十川の上流域に開けた地区であり、地区内を蛇行する四万十川が地区をほぼ東西に二分し、その両岸に耕地が開け、集落が点在しています。こちらは林業や工場誘致により発展してきた地域です。このように中土佐町は、清流四万十川、緑豊かな山野、青い海、土佐湾に展開するリアス式の海岸線など、変化に富む風致を備える自然環境に恵まれた町です。

## 「攻め」のまちづくり

### ●漁業・カツオの町

旧中土佐町区域にある久礼地区は、太平洋沿岸部の土佐湾が大きく湾入した地点にあり、平成23年2月に漁師町としては全国初の重要文化的景観に選定されました。

久礼の港「久礼港」は、中世から近世にかけて、四万十川流域を中心とし



▲久礼港

た領域各地で生産された物資を、関西方面へ搬出する重要な港の一つとして発展してきました。また久礼港はカツオ漁の港として全国に名をはせ、昭和53年より16年間、青年誌「ビッグコミック」で連載され、昭和55年には映画化もされた青柳裕介氏作の漫画「土佐の一本釣り」の舞台にもなりました。

また、町おこしの一環として、官民共同で取り組む「かつお祭」を平成2年から毎年開催し今年で30回を数えました。漁業と観光を結び付けた「カツオの町」としての戦略を展開しています。

久礼港所属の漁船は現在、大型カツオ船（乗組員約20名）が2隻、小型漁船（乗組員8名）が5隻です。

大型漁船は、2月ごろ久礼港を出た後、九州、小笠原諸島、グアム近辺、宮城県気仙沼、北方領土付近といった

ルートを、約9か月をかけて廻ります。漁の特徴は、冷凍でなくすべて生鮮水揚げのみであることです。

一方、小釣りと呼ばれる小型漁船は土佐湾周辺で漁を行い、翌朝6時半に始まる久礼漁協でせり落とされた新鮮な生カツオはその日のうちに食卓に上ります。生のカツオは鮮度が落ちやすく、これは地元ならではの特権ともいえることで、一般的にはなかなかおいしい生カツオが食べられません。そこで町では、全国の皆さんに本当においしいカツオを味わっていただくために、スラリアイスという氷点下のシャベット状の氷を用い鮮度を保ったままお届けするシステムを開発し軌道に乗せるべく現在取組を進めています。

さて、カツオ漁の町として栄えてきた中土佐町ですが、近年は漁業者の高齢化と後継者不足が課題となつていきます。実際、現役の漁業関係者は100人足らずにとどまっており、担い手不足を解消するため最近ではインドネシア等の東南アジア国籍の乗組員が増加、町の重要産業を支える担い手として活躍しています。

### ●林業・ヒノキの町

旧大野見村区域の大野見地区は91%が山林に覆われ、清流四十万十川の上流域という条件を活かした農林業が盛んな地域で、町が文化的景観として選定するなど美しい景観をたたえています。



▲久礼中学校アリーナ

す。また早くから精密機械工場や縫製工場の誘致を行ってきた地域でもあります。

林業についてはヒノキの林野率が60%を占め、この資源を活かす独自の取組として、平成23年の町立久礼中学校校舎の新築に際し、地場産材（県産材100%、うち町産材75%）を使用しました。使用した材木は、主たる構造材として樹齢100年物のヒノキを530本使用。肘木工法と呼ばれる伝統的な建築方式を用いたほか、アリーナの天井部には鉄骨やRCではなく木材で支えるラメルーフという木の強さ、美しさを前面に出した特殊構造になっています。この校舎は、平成23年木材利用優良施設コンクール（木材利用推進中央協議会主催）において林野庁長官賞を受賞しています。

木造校舎化の狙いには、①木の香り・吸音性により子どもたちの心を癒すこと、②調湿性能により居住性を高めること、③温暖化防止への貢献、④地場の森林の整備促進、⑤地域経済への貢献等があります。ぬくもりと開放感あふれる校舎を見学していると、生徒の皆さんが、大きな声で挨拶してくれます。

この久礼中学校の木材を調達したのが中土佐町、土佐市、須崎市、津野町の4市町で構成される「須崎地区森林組合」です。管内の森林面積は3、300ha余。うち人工林は約11、900haです。組合の林業従事者は比較的小若い年齢構成であり、現在は経営体質の強化に力を入れています。

### ●賑わいの町

(1) 鮮度抜群！大正町市場

久礼大正町市場は、アーケード街に露店や飲食店が軒を連ねる中土佐町を代表する観光拠点の一つです。その歴史は、明治時代中期までさかのぼり、漁師のおかみさん達が魚を露店で売りに出したことが起源となっています。大正4年、付近が大火に見舞われ消滅の危機に瀕しますが、大正天皇からの多額の寄付金により復興を果たします。住民は大正天皇に感謝の意を込めて、地名を地蔵町改め大正町として現在に至っています。

平成に入ると景気の後退に伴い市場は徐々に活気を失っていきませんが、商



店街の皆さんと行政が一体となり、カツオの町の台所として活気のあった往時の賑わい復活を目指します。平成15年、その取組が、リニューアルオープンへとつながりました。

抜群の鮮度を誇る鮮魚や干物、野菜、果物、惣菜等が新鮮かつ求めやすい価格で店頭に並んでいるほか、魚介を提供する食堂、観光パンフレットの配布やガイドツアーの案内など、中土佐町の魅力を発信する拠点の一つとして、平日はもとより、週末は特に大勢の人々の活気で賑わっています。

(2) 買う・遊ぶ・食べるがそろった「道の駅なかとさ」

平成29年7月、久礼港の隣にオープンした「道の駅なかとさ」は、町の最新の観光スポットです。コンセプトは、



▲久礼大正町市場



▲道の駅なかとさ

Shopping (買う)、Eating (食べる)、Amusement (遊ぶ)、それぞれ頭文字とSea(海)をかけあわせた、「SEAプロジェクト」として長年の構想を経て実現した事業です。

道の駅が立地する場所がかつては漁港でしたが、計画段階で東日本大震災が発生するなど紆余曲折を経て開業にこぎつけました。南海トラフ地震で予想される津波対策として高台への避難路を設けるなど、防災対策にも配慮した設計となっています。

開業以来、8か月でレジ通過者が累計25万人を達成、1年半経過後の平成31年1月下旬には累計50万人を突破しました。この間の売上額は約5億3千万円を計上するなど経営状態も良好です。

旗艦店舗である地域産品や活魚を販売するマルシェには、観光案内所や赤ちゃん休憩室、ボルタリングなどキッズスペースが設けられています。その他、テナントショップとして新鮮な魚介類を扱う浜焼きレストラン「海王」、食パンが大人気のパン屋「パン工房岩本こむぎ店」、地元のイチゴ農家のお母さんたちが作るスイーツとイタリアンのお店「風工房」等が出店しています。中でも「風工房」は平成9年に、ケーキ作りをしたことがないイチゴ農



▲道の駅なかとさ

来客層は、ファミリー層を主なターゲットとし、8割が県内からの来場者ですが、四国・中国地方からの来訪者も多く、働くスタッフもそのほとんどが町内に暮らす人々です。

この道の駅はそれぞれの店舗が独立した戸建てになっているのが特徴で、木造平屋建てならではの賑わい感の創出と、インシヤル・ランニングコストの低減につながっています。

## 守りのまちづくり

家のおかみさんたちが約2年間修業を積み、本格的なケーキショップを開店し、当時センセーションを巻き起こしたお店で、「道の駅なかとさ」のオープンに伴い移転しました。農家の女性が経営するケーキ屋という話題性もあり、メディアでも度々取り上げられるなど、県内外からの人々を呼び込む人気スポットとなっています。屋外には子どもたちが楽しめるミニ新幹線やプール、ドッグラン、芝生広場等があり、幅広い来場者のニーズに合わせた施設を完備しています。

【先進的な防災対策、必ず助かる命を守る】

南海トラフ地震は、南海トラフやその周辺における地殻の境界を震源とする地震で、南海地震や東南海地震、東海地震等が含まれます。国が平成27年に公表した南海トラフ地震の長期評価によれば、M8〜9クラスの今後30年以内の地震発生確率は、70%程度となっています。中土佐町内の最大震度は6弱以上、一部地域では震度7とされています。最大津波は22mと非常に大きくなっており、地震発生から沿岸部の早い場所では15分、久礼や上ノ加江の住宅が密集する市街地では20分前後で浸水が始まると予想されています。

「第2次の中土佐町総合振興計画」(平成29年3月)の策定段階で実施された

住民アンケートの中で、「中土佐町に力をいれてほしい施策」では「防災」が最も多く、災害に備える施策への高い関心が示されました。

このため、中土佐町では、南海トラフ地震をはじめとする防災対策をソフト対策（逃げる対策）、ハード対策（避難を助ける対策）の双方から、最重点課題として取り組んでいます。特に津波対策については、①「揺れたら逃げる」の徹底、②安全に避難ができる環境づくり（避難困難地の解消・揺れ対策等）、③地域で取り組む防災対策（自主防災活動の活性化）、④防災拠点の強化（役場庁舎・消防庁舎等の高台移転）を基本方針としています。

#### (1) 全国最大級の津波避難タワー

具体的な防災対策の一環として、中土佐町では、全国最大級の津波避難タワーを2か所、整備しています。それぞれ「純平」、「八千代」と名付けられたタワーは、高さが20m近くあり、最大級の揺れや津波にも耐える強固な作りとなっています。第1号タワーについては、観光客が多く集まる周辺観光施設の駐車場から津波避難タワーまでの歩道橋を設置し、避難人数400人を想定。タワー内の倉庫には、保存水やインスタント食品、毛布、簡易トイレといった避難生活物資が3日分備蓄されています。その他、手巻き式コンドラーや雨水貯留装置、太陽光発電システムもあり、24時間常時開放しています。



▲津波避難タワー

ます。

また津波避難タワーは、防災施設としてだけでなく、観光スポットとしても位置づけられます。平成23年に「久礼の港と漁師町の景観」として漁師町で初めて国の重要文化的景観区域に選定されたことを受け、第1号タワーはページュを基調とした優しい色合いで外装を塗装、タワー内部には木の格子が付けられるなど、周囲の景観に配慮する構造となっています。町のランドマークとしての役割も担うタワーの海拔20mから臨む太平洋と漁村の眺望は圧巻です。

#### (2) 公共施設の高台移転等事業

さらに、現在、町を挙げて取り組んでいるのが、防災拠点となる役場庁舎や消防庁舎と保育所の高台移転事業です。これは南海トラフ地震・津波への備えとして、現在久礼地区にあり、浸水想定のある役場庁舎・消防分署・保育所を令和2年度末までを目標に高台移転するものです。



▲工事が進む移転地区

この計画は平成22年度から検討を開始し、有識者による検討委員会を経て計画を策定、移転先となる高台の造成が平成29年度から始まりました。平成30年12月からは役場庁舎の建築に着工、平成31年度からは消防庁舎、保育所の着工を開始しています。保育所は町の宝である子どもたちへの環境に配慮した木造平屋建てとなっています。

移転先の高台は、中心市街地にも近く、また、災害発生後の復旧・復興の面から国道56号に近接する地点を選定しました。久礼小学校と同中学校は近接していますので、保・小・中が一体となった理想的な教育環境が実現するとともに津波指定避難所となっており、役場、消防といった町の司令塔とも連携が図られる取組となっています。

#### 未来への懸け橋

中土佐町は、海、山、川からもたらされる豊かな資源と環境を活かした、農山漁村の魅力のすべてを満たした町です。同時に、厳しい自然の猛威に果敢に立ち向かうおつとしていた町でもあります。そこには、地域をこよなく愛し、次代を担う子どもたちへ町の将来を託そうと懸命に考え、行動する人々の営みがあります。

公共施設の移転地区にこの春、新しい橋が完成しました。「久礼未来橋」と名付けられた橋の命名者は、久礼小学校に通う竹田心菜さん（写真）です。将来を担っていく純真無垢な子どもたちが、将来にわたって誇りと希望をもって歩んでいくことを象徴するかのような未来への懸け橋の開通に人々の期待が寄せられています。

全国町村会事務局  
(令和元年11月4日付第3100号)



▲「久礼未来橋」命名者の竹田心菜さん(左)